

第6回 相模川ふれあい巡視 上・中流区間 開催報告

1. 概要

日時：平成26年7月27（日） 9：00～17：30

場所：座架依橋下流→磯部頭首工→城山ダム→宮ヶ瀬ダム→田代カワラノギク圃場→金田牛久保頭首工

人数：一般参加者16名、世話役5名、スタッフ等36名、計57名

主催：相模川ふれあい懇談会

内容：「相模川ふれあい巡視」は、相模川のより良い川づくりのため設立された「相模川ふれあい懇談会」主催のもと、沿川にお住まいの皆さまや、相模川に関心を持たれている皆さまと懇談会関係者・河川管理者・自治体と一緒に川を歩き、河川に関する感想・意見・提案等を頂くことを目的として開催しました。

行程：

9：00～16：00 現地視察

16：00～17：30 意見交換会

現地視察出発前挨拶



2. 巡視

① 巡視箇所 1：座架依橋 置き砂対策

(説明)：神奈川県河川課・厚木土木事務所

- ・ 座架依橋下流右岸の置き砂対策について
平成 18 年から土砂環境改善の取り組みとして行っている置き砂の試験施工の概要・効果を説明。
- ・ 左岸の堤防被災状況について
座間市側の堤防の被災状況、及びその後のブロック等による対応策について説明。

(参加者からの質問等)

- ・ 宮ヶ瀬湖では、浚渫を行っているのか？
→行っている。
- ・ 置き砂の量はどれくらいか、置き砂はどれくらい流れるのか？
→5000m³である。毎年半分程度は流れる。
- ・ 粒径が選択的な流れか？シルト系が溜まるか？
→あまり溜まるようなことは生じていない。下流に影響は今のところ出ていない。
- ・ ダムで土砂を止める量は？川に流れてくる量は？海に流れる量は？
→詳細はわからない。
- ・ ざっくりとした量はわかるのではないか？
全体量がわかっていないと、置き砂効果がわからないのではないか？
→今後モニタリングをしっかりと行っていく。
- ・ 相模湖に溜まる土砂量は？
→25 万 m³ 浚渫して、25 万 m³ 入ってくる。
- ・ 置き砂のための土砂は質がよいものを置くようにしてほしい。
- ・ 浚渫する場合の土砂の取り方も検討すべきである。
- ・ 車が河川内に入ってくると、土砂が締め固められ固くなり流れにくくなる。
車が河川内に入るルールを作ってほしい。
- ・ 崩れた護岸箇所は、また、水あたりになるのか？
→また、水あたりになっていくと思う。堤防はできるだけ早く修復する予定である。
- ・ 護岸ブロックを水際まで置くとカヌーなどで近寄る場合危険である。ブロックは水際には置かないでほしい。



② 巡視箇所 2：磯部頭首工

(説明)：神奈川県河川課・厚木土木事務所

- ・ 磯部頭首工上下流の固定砂州について
固定堰となっている磯部頭首工の概要と、その前後に発達している固定砂州・樹林化の状況について説明。

(参加者からの質問等)

- ・ このあたりは陸地化している。広い河原を保全しなければならない。これ以上グラウンド等をつくるべきではない。
- ・ 陸地化すると伏流水が流れなくなる。伏流水のことについても検討してほしい。
- ・ 以前厚木市でアンケートを行い、グラウンドを整備して欲しいといった意見も多くあったと記憶している。その後これはどうなった？
→ (厚木市) 利用構想は河川整備計画をみながら現在検討中であり、整備計画に合わせた構想を再度検討していく予定である。
整備計画ができる直前に駆け込み的に計画を策定することはやめてほしい。
グラウンド利用がよいか自然環境が良いか、よく議論して欲しい。
- ・ ここもグラウンドにする計画があるのか？
→ 現在ゾーンを検討中であり、この箇所以外も含めてゾーンの考え方をよく話し合っていきたい。



③ 巡視箇所 3：城山ダム

(説明)：相模川水系ダム管理事務所

城山ダムの概要と機能について、DVDを用いた説明を受けた後、現地状況を確認。

(参加者からの質問等)

- ・ ダムは何年持つのか？
→ (城山ダム管理者) 神戸の布引五本松ダムは、120年程度経過しており、神戸の震災を受けているが、現在も利用されている。城山ダムはまだ50年程度であり、補修を行いながら利用すればまだまだ大丈夫だと思う。
- ・ 補修とは？
→ コンクリートにヒビなどが入った場合に、間詰めをしたり、大きいもの場合は、削ってコンクリートを打ち直したりしている。



④ 巡視箇所 4：宮ヶ瀬ダム

(説明)：相模川水系広域ダム管理事務所

宮ヶ瀬ダムの概要と機能について、説明を受けた後、現地状況、観光放流を見学。

(参加者からの質問等)

- ・意見聴取時間なし



⑤ 巡視箇所 5：田代カワラノギク圃場

(説明)：世話役 小倉副会長

カワラノギク圃場について

中津川田代地区で行われているカワラノギク圃場での保全状況について説明。

(参加者からの質問等)

- ・ 豪雨のため、説明のみで終了。



巡視箇所 6：金田牛久保頭首工

- ・ 豪雨のため、省略。

3. 意見交換会

時間：16:00～17:30

場所：アミューあつぎ 7階 ミュージックルーム1

参加者は10人程度のグループ4つに分かれ、現地を見学して「感じたこと」などを「治水」「土砂管理」「その他」の3つの種類毎に決められた色の付箋紙に書き、航空写真に貼っていきました。各テーブルには河川管理者（国・県の職員）が同席し、質問への対応を行いました。

■グループ別発表

(Aグループ)

- 座間から来た方から「置き砂」について「置き砂」が置いてある反対側でどのような効果が疑問との意見。
- 頭首工の取り入れ口がどうなっているのかが疑問。また、頭首工の下の方でサイフォン防護のためと思われるテトラポットが置いてあるが危険なのではないかとの意見。
- 宮ヶ瀬ダム放流を見たが、常時放流量を増大することは可能であろうかという意見。



(Bグループ)

- 今後 30 年の整備計画についてだが、本当に実現するのか？治水面では 7,000m³/s 程度を目標としているだろうが、せいぜい 4,000m³/s 程度どまりではないだろうか？さらに沿川自治体を巻き込む必要があると思うが実現性はどのようなかなどの意見。
- 置き砂を見せて頂いたが、もっと良い方法があるのでは？
- 城山ダム直下に水流を保持したほうが良い。
- 三川公園付近にサイクリング道路やトイレの設置を要望。
- 堆積砂を県が売りだすことも考えてみれば良いのではないかと？
- 川幅に対する水面幅が小さく景観面での課題がある。
- 自然の多様性が喪失しており、豊かの川の実現が望ましいが、緑なのか河原なのか？河原にすればクルマの進入を許す。豊かさのイメージは各人各様であり難しいとの意見交換であった。
- 河川パトロールの意味合いはあるのかといった意見。
- 堤防がない河川とは考えられないなど厳しい意見もあった。



(Cグループ)

- 座架依橋下流の置き砂のところでは、置き砂は分かったが、その後のモニタリングをしっかり行うこと。河原への進入管理が必要である。
- 頭首工のところでは、固定化されたダム形式で水流が偏り深掘化しており、広く流下させること、コスト面も含めて意見交換した。
- 右岸側としては広い河原が存在するが貴重な植生があるところであるが、クルマの進入に対する規制があってもよいのではないか。
- 城山ダムでは、ときどきの放流であり水流が途絶えている。魚道の設置もなく、ダム放流についても魚の生態系に配慮した操作が必要。
- 寒川取水堰下流付近では 22 年ほど前に撮影されたビデオでは玉石河原が広がっているが、シナダレスズメガヤが繁茂しており、水流の減少による影響が見てとれる。
- 宮ヶ瀬ダムの放流については調整ダムでもあり、もう少し多く 300～400m³/s でも良いのではないか。検討が望まれる。
- 堤防保護の植生について外来種が多く繁茂しているが、根を張る在来のシャガなども検討されているので考慮されるべき。
- 堰により樹林化が進行しているが、対策検討が必要。
- 全体として下流と上流・中流で管理が異なっている感がある。
- 予算配分としてそれ相応の配分として他の河川に劣らない河川整備計画としてもらいたい。



(Dグループ)

- まず中津川であるが、宮ヶ瀬ダムに関係するが、河原の環境が変化したことがあげられる。
- もっと一気にフラッシュ放流ができないか。流すにしても治水に影響のない範囲で放流してほしいという思いがあり、以前の環境を取り戻すことが重要である。
- 津久井湖のアオコ対策はキチンと進めてほしい。今年も発生している。
- 磯部の頭首工の改良にあたりメリット・デメリットも含めて市民に公開すべきである。
- 河原のグラウンド利用はこれ以上しないでほしい。影響をきちんと把握して管理してほしい。
- 置き砂であるが、シルトを含まない良質なものと説明されたが、具体的にはシルトの部分はどのようにしているのか？また、いつまで続けているのか？残土はどのように処分されるのか？疑問との意見が出された。



※その他

- 土砂検討会の内容の説明が必要。何が分かっている、何をトライしようとして、何ができそうであるかといったことが必要と考える。如何か？
→今後、ふれあい懇談会などの場を通じて検討していきたい。

4. 閉会のあいさつ

会長ということで、最後のまとめということですが、昨日から引き続き多様な、有益なご発言がたくさんあったと思います。私が要約して申し上げることはできないが、2日間参加して、皆さんの話しを伺いながら私の思ったことを一言だけ申し上げます。

今日は、皆さん宮ヶ瀬にいらしていただき、いよいよ宮ヶ瀬ダムに近づいた山すその道路を走っているときに最初に「赤い鉄橋」があったことをお気づきだったでしょうか。たくさんのトンネルと鉄橋を渡る最初の鉄橋で高くない低い赤い欄干のついている橋がございました。高取山、いわゆる仏果山から流れ出す沢に架かっている橋であります。あの橋から、実はわたくしの家、下のほうに屋根が見えますが、現在は2軒、上のほうに上がってまいりまして、わたくしの家は3軒目であるが、昔はもう山の外れの家でございませう。橋の架かっている深い沢の谷の淵に建っています。あの淵が、お通りになって、あそこが水の流れている沢だとはお感じなれなかったと思います。事実、ほとんど流れていないですが、わたくしの父は明治35年の生まれで、今元気なら110歳ぐらいになるわけですが、父の時代にはというよりも関東大震災のときまではとうとうと水が流れていたということでありました。

わたしがあそこに住んだのは昭和20年ごろから10年ぐらいであります。その頃はまだ流れがありましたが、現在はほとんど涸れています。関東大震災があって直後にあの沢を見た人が何と言ったか。「川に穴があいたみたいに流れがなくなった」と言ったそうです。ではそれ以前はどうであったか。父親から聞いた話では「水浴び」ができたそうである。あの辺りでは夏に水遊びをしますが、海水浴ならぬ「川水浴（センスイヨク）」をします。あそこまでアユが遡ったとのこと。われわれ子供のころは、まだ流れがあって本当の崖になるような山すそまで川が流れていました。そういう頃の中津川はどうだったかということ、川に入ると脚に魚があたるほどたくさんいたということである。それは父だけでなく同世代の方が仰っています。川床はどうかということ、基本的には砂利がなかったとは思いますが、基本的には岩盤があったといわれています。岩盤を流れていた。それは中津川の中流の中津あたりでも岩盤だったと。今日お越しの大木さんのお父さんがつぶさに書き残していらっしゃいます。その岩盤の出ている岩の上からきれいな水が流れている川に飛び込んで、いわゆる水浴びをしたと言います。

つまり、そういう話を聞いて育ちまして小学校の4年生か5年生の頃、当時は小学校ではなく、国民学校初等科でございました。戦後、こんなに良い本が出たものだと、子供心に感じた。新書版の大きさであったが小学校というより中学校の地理のハンドブック、教科書のような子供のための教養書が、

あの頃は絵に書いたようなすばらしいものがあったのです。紙はわりあい厚めで背は針金で綴じて本にするような、あれは背綴じというのでしょうか、そういう装丁の本であった。今、思ってみてもページ数は 100 ページあったかどうかと思います。そのなかに「山の若返り」ということが書いてありました。何かというと、関東大震災は丹沢山塊の山の若返りだったというものです。「若返り」とは何か。丹沢山塊は丸い山だったそうです。そういえば「なんか丸」という山の名前、残っていますね。丸かったそうです。それが地震で崩れて尖がった険しい山になったそうです。険しい山になるとまた崩れ始めから、若返りなんだそうです。それを子供心に読んでですね、あの赤い橋が架かっている沢が大雨が降りますと鉄砲水が出るんです。そして沢に家がありますから、沢に家があるというのは水利が便利だから住んでいる。そういう家が流されたりする。あの橋のすぐ下、わたくしの家の裏の方にあたる辺りは沢の道筋がまったくわたくしの知っている範囲で変わってしまうのです。そういう事実をみて、それは何か。関東大震災の後遺症といえ、後遺症ですけれども、天然自然の山の若返りの現象だということなんですね。

ですから、わたくしは昭和 30 年ごろに砂利取りが禁止されたことを聞いて、その前は関東大震災で流れ出した巨大な砂利を掘り取る作業だったとわたくしは理解していました。

くたびれてしまうので与太をひとつ。今日大相撲の優勝は決まったでしょうか。5 時半であるので。昨日見学した相模大堰というのを聞きますと、ご記憶の方いらっしゃるでしょうか。わたくしは厚木出身の力士で大関になった「相模川」を思い出します。まさに「相模川大関」なのであります。そして、彼は大関どまりで廃業しまして砂利取りで 1 日 2 人分稼いでいるという話がありました。わたしにとっては、相模川とはそういう川であります。

ですから、人に会うたびに関東大震災以前の丹沢山塊の相模川水系と、それによって変化していく相模川水系と、そういうものをベースにして近代化の相模川を見ていかないと見えないのであろうと、今日見学した磯部の対岸の猿ヶ島、これは江戸時代から愛甲郡の分で、決して相模川の東でないが、地元では磯部から離れていった、去っていった島なのだと仰るのですね。それに現に猿ヶ島のお寺の檀家は、相模原市のほうにいっぱい住んでいらっしゃいます。ですから事実と思います。それはある点では中世の文書でも証明できます。そのような事実をわたくしは知っていますので、あそこで川の流れがどっちに寄っているとと言われても大変納得しにくい。あたりまえではないかと。大自然というのは大きな歴史を持っているわけで、そういうものを踏まえ、是非考えていただきたい。

昨日今日のご発言のなかでも、たとえば今日の中沢さんのご発言を聞いて

はっとしたのだが、わずか数秒のところをみても 20 年の変遷が既に見えていると。川は生きているのです。生き物なのです。我々は生き物だと思って観察し、そして計画して当面の困難を乗り越えなければならない。でもその背後には川の何万年の歴史を無視しては考えられない。わたくしはいつもそういう思いで見学させていただき、この 2 日間でもずいぶん色々なことを学びました。三川合流のところ、相模川が一番狭い。わたくし、見落とししていました。大変だいじなこととっております。2 日間、この思いがますます高くなりましたし、わたくしの家の上を通っていただいて、そんなときでもないこんなお話しをできませんので申し上げました。

是非そういう考えを皆さんが抱いていただくと有難いと思います。どうぞ、みなさん体調を崩さないようにご留意いただきたいと思います。2 日間、どうもありがとうございました。この後も懇談会が続くようなので、是非の日本の河川文化の発祥の地に相模川がなるように願っています。

